

§ 16 内世界的存在者において通示される，環境世界の世界適合性

P.169-178

2020年1月6日 島村

配慮的な世界=内=存在に内世界的存在者が会い，したがってその内世界性が現れるとともに，それと同時になにか世界というものも現れてくるのではあるまいか。

上 P.170

§ 16.1 用具的存在者の客体性

認識は，配慮において具わっている用具的存在者を通過したあとではじめて，ただ客体的に存在するだけのものを開発する方向へ進んでいくのである。

上 P.168

目立たしさ (ただ事物の属性を眺めやるのではなく,) 配視によって使用不可能な状態を発見するとき，その事物は目立ってくる。このとき，その事物は用具性を失ったわけではない。「修理中のもの」という新たな用具性へと配慮されてゆくのである。しかし一方で，この用具性は「役に立たないものがただそこにある」という形で，その事物の客体的性格を浮かび上がらせる。

催促がましさ ある事物が手もとにない(不在である)ことに気が付き，それが緊急に必要なようになってくると，手元にあるものの方は催促がましくなり，そのため用具性という性格を失いそうになる。そのとき，手元にあるものの方は「ただ客体的にしか存在しなくなったもの」という姿で現れてくる。

煩わしさ 配慮にとって邪魔なもの，構っておれないものは，煩わしさを浮かび上がらせる。この煩わしさも，用具的存在者の客体性を浮かび上がらせる。

§ 16.2 用具的存在者の世界適合性

用具的存在者は，何かしらの「～するためにある」という構造的な指示関係によって規定されている。この指示関係は，たえず念頭におかれているものの，ふだんはそれ自体が眺められているわけではない。だが，その指示関係が阻まれたとき，指示関係は表立ってくる。これによって，指示関係が配視的に呼び覚まされるとともに，ひいては作品の連関，仕事場全体が(はじめから絶えず念頭に置かれていた全体として)眼に写ってくる。

同じことは，道具的存在者の欠如についてもいうことができる。日常当たり前で気にも留めなかったような用具的存在者が見当たらないとき，配視は当てを失い，そしてはじめて，無くなったものが何のために，何とともに手元にあったのかを思い知らされる。失ったものは配視によって「開示され」，それに伴い環境世界が我々に訴えてくる(通示される)。

§ 16.3 用具的存在者の非世界化

我々が日常的に手元になる用具的存在者に接しているときは，それらの指示関係は配視にとって主題的ではない。このような用具的存在者の性格は，先ほどの言葉を使えば「目立たない」「催促がましくない」「煩わしくない」といったひかえめな性格である。

これこそ、われわれが「それ自体においてある」というときに念頭においていることなのであるが、それを我々は、妙なことに、「さしあたっては」客体的なもの、主題的につきとめられるものに帰属させているのである。しかし、主として客体的なもののみに向かう態度では、「自体」ということを存在論的に解明することは、まったく不可能である。

上 P.176

いままで我々が行ってきた解釈によると、世界=内=存在とは、道具全体の用具的存在にとって構成的な機能をもつさまざまな指示関係のなかへ、非主題的に配視的に融け込んでいることである。

上 P.177